

し、真享書上により

〔當代記〕慶長十二年十二月廿四日、圍碁之上手本因坊法花宗清僧也。○中 此比圍碁手相ノ事、本因

坊是ハ利玄ニ、半石利玄、十三道石、七八五三ヶ年以前ヨリ、利玄ト手相同事也、ナミノ上手事、仙也

老人、鹿鹽、仙角是仙也、子當春於筑壽齋年五、是算當年廿二、是モ門人六藏等也、並ノ上手ト云ハ、本因

坊ニ先ノ碁ナリ、

〔駿府政事録〕慶長十六年十月朔日丁卯、本因坊箒知自京師來、是當時圍碁之名譽也云々、

〔探鑑下物〕碁利玄

日蓮宗ノ僧ニシテ、碁ノ上手也、南莊湊村ノ海濱ニ菴ヲ構テ住ス、寛永年中ニ、專碁ノ術ヲ以テ天

下ニ流布ス、

〔本朝世事談綺藝〕碁

本朝は吉備大臣にはじまる、○中 中世後土御門院の朝に、意雲老人妙術たり、そのち後陽成院

の朝に、寂光寺本因坊日海法印、天下の巧手とす、代々本因坊と稱す、頃年の本因坊道策は、古今の

妙術たり、碁聖といふべきか、

〔北窓瑣談後編四〕一道策本因坊は、近世圍碁の名人と云、察元亦其頃の妙手にして、道策と碁を圍

むに、勝負たがいにして、其優劣を見る事なし、但碁盤を四面寄並べて一面として圍む時は、察元

遙に劣りて一番も勝事能はず、是盤面廣くなれば、察元が眼力行届きて見る事能はざる故なり、

是人才の庶人たる時は、格別常人に異なることあらざるに、擧て用る時は、大に其功をあらはす

がごとし、

〔因云碁話〕秀吉公兩將を評し給ふ事

本因坊道策身まかりて後ち、井上因碩また一代の名人、碁博士の上首たり、或人問ふたとへば